

東京電機大学中学校・高等学校入学式式辞

新入生のみなさん、入学おめでとうございます。東京電機大学中学校・高等学校を代表して、みなさんの入学を心から歓迎し、お祝いの言葉を贈りたいと思います。

保護者の皆さまには、お子様のご入学を心よりお慶び申し上げます。多くの中学校、高等学校の中からお子様の進学先として本校をお選びいただきましたことに、深く感謝申し上げます。

学園関係、PTA、校友会、同窓会の方々を来賓としてお迎えし、入学式をあげることができますことは、学校として感謝の念に堪えません。厚く御礼申し上げます。

本校の母体となった電機学校は、1907年に創立され、早くから教育理念として「生徒第一主義・教育最優先主義・実学尊重」を唱え、また東京電機大学初代学長でファクシミリ発明者の生みの親である丹羽保次郎先生の「技術は人なり」という言葉も、本学園の教育理念を象徴するものとして受け継がれています。そうした先人たちの思いを受けて、本校の校訓「人間らしく生きる」は定められました。

新入生のみなさんには、これからの3年間、6年間は、ある意味で「人間らしく生きる」という校訓の意味するところ、求めていることを考え続ける時間だと思って下さい。そしてその答えは408名の新入生それぞれに異なっていて一向に構いません。

本日、みなさんが本校に入学されるにあたって、私からは中学高校の6年間にみなさんがどんなことを学び、気づき、悩み、そして大人へと歩みを進めていけばよいのか、今から80年前に出版された、当時の少年少女向けに書かれた一冊の本を紹介しながらお話ししようと思います。

その書名は吉野源三郎著『君たちはどう生きるか』です。日本と中国の間に本格的な戦争が始まった1937年（昭和12年）に出版された古い本です。しかしそうした暗く重苦しい世相を反映した場面は全く描かれていません。主人公はコペル君というあだ名で呼ばれる中学1年生の少年です。コペル君のお父さんは2年前に病気でなくなり、今はお母さんと二人、比較的裕福に暮らしています。すぐ近所に大学を卒業したばかりの叔父さんがいて、この叔父さんがコペル君の良き相談相手となって物語は進みます。

ある日曜日、コペル君は叔父さんと銀座のデパートの屋上から（今で言えばスカイツリーから眺望を楽しむ感じで）東京の街を見下ろしていた時、不思議な感覚に襲われます。見渡す限り続く街並みや行き交う多くの人や車の列を見ているうちに、そこには自分とは縁もゆかりもない何十万、何百万の人々がそれぞれバラバラな存在として生きているという事実と、同時にこうして眼下に行き交う人々を見ている自分もまた見ず知らずの人に見られているかもしれないということに気づき、自分自身は都会という大きな海に渦巻く潮

の中の一つの小さな水玉にすぎない存在と感ずるのです。

コペル君はこの不思議な感ずを叔父さんに「人間って水の分子のようだね」と話すが、叔父さんはコペル君の感ずきを、天動説から地動説へと地球観・宇宙観を180度転換して説明してみせたコペルニクスに例えたのです。これが彼のあだ名の由来です。つまり、すべての物事を自分中心に考える子供が天動説的なものの見方に立つのに対して、広い世界の存在を前提に物事や人を理解しようとする地動説的なものの見方が大人の考え方であり、コペル君が誰に教わるでもなく「人間は広い世の中の一分子だ」と感じたことの深い意味について教えてくれたのです。

子供から大人へと成長途上にあるみなさんもコペル君同様に自分中心の世界を突き抜けて、自分の回りに広がっている大きな世界、社会の一員であることに感ずき、その一員としての役割を果たすことの意義を学ぶことが、みなさんの中学・高校時代の大きな学びの目的であると私は考えます。

さて、コペル君はこのあとも中学校での友達との交流や叔父さんとのやり取りを通じて、いろいろな経験を重ねていきます。そして先ほどの「人間は水の分子のようだ」という発見をさらに発展させて、人間は見たことも会ったこともない大勢の人と知らないうちに網のようにつながっていることに思い至り「人間分子の関係、網目の法則」と名付け、人間社会が経済学、社会学で言うところの「生産関係」によって成り立つことを学びます。貧しいクラスメイトの存在を通じて今で言う経済格差の存在を目の当たりにし、上級生との対立を通じて正義や勇気について考え、熱い友情によって交わされた親友との約束を自ら裏切って深く悔やみ苦しむ経験などを重ねながら、コペル君は少しずつ心と身体の成長を遂げていくのです。

今回、私は久しぶりに『君たちはどう生きるか』を読んで、時代の古さを全く感じさせぬ現代的な課題が描かれていることに驚かざるを得ませんでした。そこに採り上げられているエピソードは社会情勢や背景の変化はあるものの、本質的には21世紀に生きるコペル君と同世代のみなさんが抱えるだろうさまざまな問題と少しも違いはありません。まさに現代に生きる古典と呼ぶに相応しい名著だと思えます。同時に登場人物たちのその後を想像すると、暗い思いをいだかざるを得なかったことも事実なのです。太平洋戦争中に戦場に赴き命を落とした世代はまさに叔父さんとコペル君たちだからです。

ところで、コペル君は物語の最後に叔父さん宛に次のような手紙を書いています。

「僕は、すべての人がおたがいによい友だちであるような、そういう世の中が来なければいけないと思います。人類は今まで進歩して来たのですから、きっと今にそういう世の中に行きつくだろうと思います。そして僕は、それに役立つ人間になりたいと思います。」

残念ながら、80年前のコペル君の願いはまだ実現されていません。しかし、彼の希望はすべての人間のものとして、いつの日か実現されるべきでしょう。みなさんもまたコペル

君のように、自分の目で見えて、自分の頭で考えて、自分の思いを自分の言葉で多くの人に伝えられるようになってください。それが、人間らしく生きることを学ぶ第一歩となるはずです。

以上をもって、私からみなさんへの歓迎の言葉とさせていただきます。

平成 28 年 4 月 7 日

東京電機大学中学校・高等学校
校長 大久保 靖

吉野源三郎『君たちはどう生きるか』（岩波文庫版）